
魔法少女まどか マニア？

キラワケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マニア？

【Nコード】

N5059Q

【作者名】

キラワケ

【あらすじ】

魔法少女まどか マギカの二次創作および本編ネタバレ多数、ご注意ください。某ゲームで言うパロディモードのノリで書いてみました。キャラ崩壊、内輪ネタ、オタクネタにご用心ください。独特すぎる解釈で展開される、良く分からないマギカワールド！ 始まります。

夢の中で逢った、ような…… 1話の1

私はモノクロの世界を駆けている。

四方八方、辺り一面、完全統一。シロとクロという対の色が延々と繰り広げられている。

床を見降ろしても、上を見上げてても、横目に左右を見ても。

そこにはシロとクロ。たったそれだけで構成された寂しく薄暗く虚しい世界を私は走っている。

「はあはあはあ………」

どれぐらい走っただろう、足を前へ前へと進めてひたすら走っていた。

変わらぬ色と変わって行く景色、それはあまりにも不気味だった。そして、私は思う。

「(……カラーインクなかったのかなあ)」

美術さん、色はこまめに補充したほうがいいよ？

非常口。緑地に白い人と開いた出口が描かれ、人が出口に走っているかのような体の標識。

おそらくこれがこのモノクロの世界を抜ける出口なのだろう。

私は思わず立ち止まって、ゆっくりと一歩一歩を踏みしめながら、階段を見上げた先の標識照らす元へと向かった。

そして、標識の真下には扉が一つ。私は躊躇なくその思いのほか重量のある扉を開けた

「……うわっ」

目の前の広がるのは廃れた世界、かつての私が住み暮らしていた町でもあった。

ビルは傾き、空は真っ黒の雲に包まれ、まさにそれは世界の終わりを覗いているかの光景だった。

「！」

そんな荒廃した景色を動き回る

「（女の子!?!）」

誰もいない世界でただ一人、景色に溶け込むかのような長い黒髪をなびかせてかつてのビルへと立ちつくしていた。

そして、彼女は動く

瞬く間にビルの屋上間を飛び乗って、確実に距離を伸ばしていく。

「すごい！ CG使ってないのに！」

流石日本の誇るアニメーション、やはり手描きに限るなあ……ってそんなこと言ってる場合じゃなかった。

そもそもこの世界はなんなのか、そして彼女は何者なのか。

その全てを知る者は、脚本家の　　さんのみだった。

「ひびく……」

私は彼女が受ける仕打ち、襲いかかるビルにのしかかられる姿を
目の当たりにしてそんな言葉が漏れる。

「仕方ないよ、彼女一人では荷が重すぎた」

隣のおコジヨの出来そこないのようなマスコット風情が応える。

「でも彼女も覚悟の上だろう」

無表情で語るんじゃないやねえ、この淫獣が。小麦色に塗って時空管理
局に送り返すぞゴラア。

「そんな……あんまりだよ！　こんなのもってないよ」

隣に居るのが良く分からない生物だなんて！　私はプリ　ユアみ
たいな妖精系が良かったのに！

「あきらめたらそこまでだ。でも、君なら運命を変えられる」

「うち、足元みやがって。」

「避けようも無い滅びも、嘆きも。全て君が覆せばいい。そのため
の力が君は備わってるんだから」

「……本当なの？　私なんかでも、本当に何か出来るの？　こんな
結末を変えられるの？」

「もちろんさ、だから僕と契約して　」

「契約？」

「契約、僕と君が　」

「……ごめんね、キュウベエ」

「いきなり何を言い出すのさ、まどか」

「私言い忘れてたの……私ね、私」

「もう独学で魔法使えるようになってるんだー」

「……え？」

「え？（遠くからほむら）」

「という事でレイ　ングハート、いっくよー」

『All right』

「あの、まどか？」

「これが私の全力全開っ！　スターライトブレイカアアアアア」

「って、えええええ僕に撃つのおお！？」

「誰がお前みたいなお黒幕臭漂っ奴と契約する？　ということでお南無」

「ぎゃああああああ、僕の計画がああああああああ」

そしてこのマシユマロをアロソナルファでくっつけまくったような白いマスケット被りは消え去った。

キュウベエ、お前のことは忘れない。でも最後に一言させてね……口ぐらい動かせやコラ

「……（呆気にとられるほむら）」

「さー、ついでにほむらちゃんが戦っている親玉にスターライ（ry

っくくー！

夢の中で逢った、よつな……1話の2（前書き）

キャラが完全崩壊しております。一発ネタ大半でそのネタが設定として生きることには有りませんー

夢の中で逢った、ような…… 1話の2

私はお母さんを起こし、二人洗面台の前に立って鏡とにらめっこしながら歯を磨いていた。

「最近どうなんよ？」

「ひとみちゃんにまたラブレターが届いたよ。今月になって二通目！」

「ふっ、直に告ることもできねえ根性のねえ男はダメだ」

相変わらずの辛口批評、しかし正論だと……私も思う。

「大体男がラブレターってなんだ？ 最近の男子は女々しいなあ、校舎裏に呼び出してがデフォだろうに」

「お母さん？ それはそれで古めかしいよ？」

「そうかい？ あたしや校舎裏で告白されたよ？」

「え、お父さんに！？」

「違う違う、断ったヤツ。あいつあたしと一戦交わしてよ……もちろんあたしが勝手”その強さに惚れちまったよ”とかポロポロのボロボロの顔でそいつ告白してくるんだぜ？」

「うわあ……」

「だれが受け入れるかっての！」

ガラガラ、ペツと吐き出して、うがい。

「それに見た目によらず頼れる男があたしはいいんだよ！ それも料理とか作ってくれ主夫がさあ」

「だからお父さんなんだねー」

「うっん、他にもあるよ。聞きたい？」
「うっん、うっん！」

ちなみにお母さんの惚れポイント話に夢中になったせいで遅刻しました。

流石お母さん、その男らしさがタマリマセンワ

*
*

「あとそれから、転校生を紹介します」

「え、そっちが後回しかよ……」

ちなみに今まで”大事な話”と切り出した上で延々と彼氏の悪口を聞かされたクラスメイトは皆が思う。

「（優先順位逆だろよ）」

というか似たような話は何度もホームルームから担当の授業まで聞かされて飽き飽きしていた。

そしてその”転校生”という今までの固まりつつあったクラスに新鮮さが投入されることもあって、クラスはざわめく。

「どんな子だろー？」

「可愛い娘かな？」

「可愛い（男の）娘がいいなー」

「イケメンカモン」

「美少女ギブミー」

とそれぞれ好き勝手に話始める。そしてガラス戸が開き彼女は現れた。

「じゃあ暁美さん、いらっしやい」

すたすたと黒板の前を歩いて行くのは、見惚れるほどの美女だった。

スレンダーで長身、黒い髪はしなやかで少しキツ目の眼を除かなくとも文句なしの美女だった。

しかし私は、そんな姿を見て。

「……………え？」

思いだすのは今朝の夢、暗い世界で一人戦う黒髪の美女。

「嘘……………まさかっ」

彼女はあまりにも夢に出てきた美女に似ていたのだ。

「はい、じゃあ自己紹介いってみよー」

どうして？ あの夢に出てきた彼女がなぜここに？ ここにいる彼女がなぜ私の夢に？
訳が分からなくなってくる、正夢。狸に化かされているような気分だった。

「暁美ほみゆらです」

『……………』

静まり返る教室。

「暁美ほみゆ……ほむ……」

『……………』

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

彼女はとにかく仏頂面だった。しかし私は思う、いやおそろく皆は思う。

『（この子かわいい……………）』

癒されるあまり、もう夢のことはどうでもよくなった。

* * *

「……………」自己紹介というには短すぎる、名前とほんの挨拶だけを喋るとすぐにお辞儀する。

『あ、ああ』パチパチパチという彼女の反応に困る軽い拍手がクラスで巻き起こった。

「……………」そしてある一点へと目を映す　その目線の先にはまどかが居た。

「ええっ……………」うつ「凝視してくる転校生に戸惑い途端に眼を落してしまっまどか。」

「……………まどか、可愛いわ」

私が転校してきたのもまどかを追いかけるためだった。

この学校の教室が学校の校舎同様ガラス張りの透けている仕様で良かったわ。

なぜなら、この教室に入る時までまどかの……う、うなじを見る
ことが出来ていたから！

眼を伏せちゃうまどかもたまらないわ……じゅる、涎出そうだけ
どガマンガマン。

ああ、かわいい。今すぐ自己紹介終わらせて話しかけたい！
でもキャラ的に駄目よね……困りようだね。

でもこうして会えたから私は何の問題もないわ！
これから毎日が幸せねっ！

「ごめんなさい……緊張しすぎたみたいで気分が、保健室に行かせ
てもらえるかしら」

転校生という目新しさから生徒に囲まれ、質問攻めに律儀に返し
ていくのが嫌になったほむらはそんな理由を付けて逃げ出す。

「あたしが案内する！」

「あ、あたしがっ」

「いえ、お構いなく。係の人をお願いしますから」

ふふ、悪いわね。でも私には案内してほしい人がいるの。

「鹿目まどかさん、あなたがこのクラスの保健係よね？」

「え……！ えっと……あの」

動揺してるまどかが可愛い！
こんなに近くでまどかを感じられ

るだなんて……この学校に来て本当に良かったわ。

「連れてってもらえる？」

「……………」

ああ、私の後ろをまどかは歩いてくれてる！ 嬉しい、でも本当なら隣を歩きたいけど……キャラな以上仕方ないわね！

「あの……なんで私が保健係なのを……」

そんなの決まってるじゃない！ 私にとっては常識。まどかスキーなら常識の範疇よ！

「……………」

「え……あつ」

直ぐに応えないとつろたえるまどかを聞いて素晴らしい！

「早乙女先生から聞いたの」

聞いたのは確かだけど、とつくの前から調べはついてるわ。今の身長体重座高スリーサイズまで応えられる自信が私にはある！

「そ、そうなんだ。えっと……保健室は！」

「こっちよね」

だめよまどか、まだ一緒に居足りないわ。もうちょっと、もうち

よっと歩きましょう。

後ろに可愛いまどかの気配を感じていたいので、ああまどか可愛い
きて私は

それはとっても嬉しいなって……2話の1（前書き）

もうキャラ崩壊ってレベルじゃない上にある種9話のネタバレ含みます、ご注意ください

それはとっても嬉しいなって…… 2話の1

「私はバマミ」

彼女は凜と華麗に宙を舞い、無数に現れたマスケット銃を使い捨てるかのように一発一丁使い、目の前の得体の知れない何かを撃ち抜いて行く

「あなた達と同じ見滝原中学校3年生」

爆発を背後にして。

「そして キュウベえと契約した魔法少女よ？」

私とさやかはきっと同じことを思っただろう。

「なにこの電波さん!？」

というか淫獣、キュウベイトってなにその中途半端さは。

うっかりハチベエか十兵ちゃんにしとけばいいのもの、キュウベイトって…… (笑)

まったく、こんな電波なイタイ先輩にこんな中途半ベイさんとか現実にいる訳

「と、やっぱり夢だった」

……んー、でもどうなんだろう。こんな電波でイタイ先輩にセンスの無い淫獣ネームを夢に見る私って

「私がイタイんだ……」

まどかこと私は頭が痛くなった。中学生にもなってそんな中二病まがないな

「おはよう、まど」

「るせえ、黙れ。こっちはショック受けてるんだ」

「まったく……おかげで右手が疼いてつい万年筆で目を貫いちゃったじゃないか。」

「あーあ、ただでさえ気色悪い白い体が血に染まってるよ」

<ちよつとヤバいね、性悪まどかさん！>

巴マミという先輩の家へとやってきた。

あの電波なことが本当だって言うんだからきつと重症で適当に病院から抜け出したクチだろう。

「うん、でも私は非常に寛大な心を持っているし？ 妙な詮索はしないけども？」

にしてもあの白い生物、なんなんだ？ 撃ち抜いてやったのにすぐにケロっとして帰ってくるし。

不死の血でもあるってか？ それなら一緒に飛び散った血も飲んで行けって話だよ。

「お、お邪魔します」

小綺麗なところ住みやがって、それで一人暮らしい？

にしても魔法少女って……その学年で少女は少し厳しいだろに、少女って括りはどちらかという小学生限度まで下方修正すべきだと私は思うね。

まあでも少し病院にお世話になっていた人なんだろうだから慈悲のあまりつつこまないけど。

てかキュウベイ勝手にテーブルの上に乗んな、私は軽蔑とか差別的な意味でなくてな。

普通に地べた歩いているお前がテーブルに足をのつけるのはどうよ？

そりゃあ血も汚いけどさ、それ以前の問題だよ。妥協して新聞紙か脂取り紙の上でもいればいいよ。そんなら一発貫くだけで済ますからさ。

「これがソウルジェム」

「はあ 綺麗」

黄金色に輝く卵型の宝石を金属の枠にはめこんだようなものをマミさんは見せてきた。

なんだろう……ムシヨウに割りたい！

割って良い？ 私さあ、綺麗なもの見つけると壊す癖あるんだよね。ルビーとか血の色に輝く宝石だったからつい万年筆で貫き割っちゃったし。

サファイアとかもどんだけ深海の色してんだよ、って万年筆で切り裂いちゃったし。

「キュウベイとの契約によって生み出される宝石よ、魔力がうんたらかんたら」

「契約って？」

青髪……さやかが聞いた。良い質問だ、私もちょうど面倒だけど質問する予定だったことだ。

「僕は君たちの願いを一つ叶えてあげる！」

「ほんと」

「願い事って？」あれか、魔王になりたいとかでも叶うのか？

「どんな奇跡だって起こしてあげられるよ」

「……でもね、疑問に思ったんだけど淫　　キュウベえにそれはメリットがあるの？」

あぶないあぶない、つい淫獣と言ったところだった。

「え、女の子と契約だよ？　そして着せたいコスチュームを何度だつて着せるそれが僕のメリット　　」

「てめえ私らは着せ替え人形さんですか？　シルバニアの愉快的仲間たちですか？」

　　と言いつつキュウベえを掴み取り、床に叩き付けてから右足でグリグリと踏みつける。

「ま、まどか！？　キャラ変わってるっつて！」

「気にいらねんだよ、その赤カビの生えたマシユマロみたいな体しやがって」

「赤カビ！？　錆じゃなくてカビ！？」

「ま、まどか……も、もっつと」

「キュウベえ！　あなたそんな子……そんな趣味だったの！？」

「だか……ら……」

「僕と契約して魔法少女になってほしいんだ」

「澄まし顔で言うんじゃない、口開いてみるよ！」

「む、無理だってキャラデザイン上変化するの目はただけなんだって」

(この設定では)続かない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5059q/>

魔法少女まどか マニア？

2011年3月26日23時50分発行